

Title	"L'objectivation des idees" : トミスト認識論の一考察
Sub Title	"L'objectivation des idees" : study of the epistemology in Thomist
Author	箕輪, 秀二(Minowa, Syuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1957
Jtitle	哲學 No.33 (1957. 3) ,p.19- 46
JaLC DOI	
Abstract	<p>P. Marechal recherches comment la coincidence de conditions ontologique subjectives (intelligences finis) et de conditions ontologique objectives (donnees extrinseques) has the characters of the prise de conscience . In other words, his probleme is that: comment la prise de conscience, effectivee dans l'acte immanante ou communient objet et sujet, peut-elle etre la conscience de l'objet, en taut qu'oppose au sujet ? . M. Maritain studys to show that la chose est donnee avec l'objet et par lui, et qu'il est meme absurde de les volior reparer . We cannot think that the obejt is identical with the chose at the beginning, on the contrary, we must verify s'il bien ainsi . For M. Maritain, therefore, the question in epistemology is that; la pensee se donnant du premier coup comma assuree sur les choses et mesuree par un esse independent d'elle, comment juger si, comment, a quelies conditions et dans quelles mesure il en est bien ainsi . Their resolutions to this problem are very personal, and different each other, but they both research the same one probelm; "l'objectivation des idees." P. Marechal neglects the resolutions that the thomist before him had researched in virture of the passivite . In the case of their resolutions, we cannot prove the perceptism integral . Disspating their ambiguity for this resolutions, tries P. Marechal to surmont the kantian agonsticism by his unique theory - le dynamisme intellectuel . M. Maritain resolutes this problem by his rintuition abstractive and the characteristics of the Verbum mentis - le signe formel, not the signe instrumental of the object. L'intuition abstractive explain the immanance d'objet , le verbum mentis considered as le signe formel verify the objectivation de la chose et de l'objet . P. Marechal, who depends upon the l'action of M. Blondel, M. Maritain, who neglects the bergsonisme de fait and estimates the valeurs of the bergsonisme d'intuition , they try to establish the valeur of ideas in the metaphysical region, and investigate comment est possible, et comment est fondee la pretention naturelle de l'intelligence . Their capital interests for the l'objectivation des idees principally consist in the establishment of the realism of common sense against the idealism of Kant and of Descartes that starts from the percipi , not the esse . At the first stage of 19th century, the thomist -P. Garrigou-Lagrange, P. Gardeil, P. Rousselot,- they all effort to research the one same problem; "L'objectivation des idees". They both try to establish the valeur of the ideas in the metaphysical region, and to verify the realism of common sens in their different ways. In my writting, I intend to show the methodes of resolution in M. Marechal and in M. Maritain, and to study the meaning of their resolution to the L'objectivation des idees against the Critique of modern philosophy. End.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000033-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

„L'objectivation des idées“

——トミスト認識論の一考察——

箕 輪 秀 二

十九世紀初期に於けるトミストの認識論は一つの問題、即ち „L'objectivation des idées“ を廻つて展開されて来た。近代新哲学、特にブロンデル、ベルグソン等の接触によつてその中心課題は可成單純化されてこの様な問題をとるに至つたとは云い、その解決に於いては各々独自の見解を示めして居る。本論文に於いては主としてその中の、マリタンとマレシアルのこの問題に対する解決とその方法を考察して見たいと思う。ベルグソンから出て、ベルグソンを超越せんとするマリタン、カントから出て、ブロンデルの „L'action“ に訴える事によつてカントを超越せんとするマレシアル、次いで彼等に於けるこの問題の解決の意義を考究して見たいと思う。

マリタンの認識論に於ける批判の問題は、形而上学的存在に就いての我々の認識を確証する事にあつた。

le cogito に出発し因果律に支えられながら思惟の、事物へのかけ橋を探し求めて、^(註1) 如何にして我々は *percipi* から *esse* に到達し得るや^々と問う近代哲学の批判の問題設定に対して、マリタンは先づ^々 思惟は最初、事物によつて確証され、そして思惟とは別箇の *esse* によつて計られたものとして与えられている^々 事を認めて、我々の批判の問題は如何なる条件、如何なる度合に於いて、斯くの如く在るかを、どの様にして判断するか^々と云う事であると云

„L'objectivation des idées“

う。

註1 主としてこの文ではカント、デカルト等近代主観主義哲学の問題設定を、マリタンは指している。cf. Degrès du Savoir Paris, 1932. Chapt., III. Realisme critique. 特2 pp. 146—158.

註2 Ibid; p. 142.

マリタンによれば我々の認識批判の出発点は *le cogito* ^(註1) でもなければ又純粹思惟 (*le pure pensée*) でもない。若し我々が素朴性と独断性から脱れるために普遍的懐疑から出発するとすれば、こゝで問題となるのは意識された懐疑、表象された懐疑であつて、実際に生きられた懐疑とはならないのである。esse に到達するために *percipi* から出発してはこの試みは失敗に終る。

我々の智性を我々が反省するとき、智性は \wedge 我々の認識批判の不可避な最初の要素、即ち“直接所与”は自然的に (*naturement*) 在るがまゝの認識の対象でなければならぬ \vee 事 ^(註2) を、そしてこの対象は \wedge 直接的なあらゆる内容を持つた \vee \wedge 精神の外に在る存在 \vee (*l'être extramental*) であり事物そのものでなければならぬ事を承認する。我々はこの直接的な所与を如何にしても否定し得ない。かゝる意味に於いて、マリタンにとっては認識の批判は存在論若しくは形而上とは別箇のものとして ^(註3) は考えられないのである。かゝる対象、“我々の裡に移し入れられた存在論的对象”を我々の直接的な所与として、出発点として形而上学的存在に就いての我々の認識の価値を確認せんとするのである。

註1 マリタンはデカルトの *le cogito. — cogito, ergo sum —* を、あらゆる哲学の出発点と認識批判の出発点との両面に亘るものとして、その多義性を批判して *cf. Degrès: pp. 147—148. (scio aliquid esse)*

註3 初期のトミストに於いては認識論は論理学の一部として、考えられて居た。即ち *logica materialis* といふ。

(cf. Liberatore, „Institutiones philosophical,“ p. 231, Tongiorgi, „Institutiones philosophicae“ p. 18) Mercier にとってはこれは心理学の一部として考えられる。(cf. *Critéologie Générale*, 1900.)

又一般にルーヴァン学派やジェスイットのトミストは之れを哲学の敍説として取扱ひ何ら之れが論理学の一部であるか否かは問わなかつた。(cf. Noël, „Le réalisme immédiat“ pp. 163—167, Maréchal, „Le point de départ de la Métaphysique“ chair V.)

一部に於いては逆に論理学を認識論の一部と見做したものもある。(cf. Van Steenberg, *Epistémologie*, p. 23—24.) 之れは共に哲学的諸問題を論ずる前に我々のこの論ずる能力を検討せねばならないと考える Descartes: Kant の認識論に対する考えに相応するものである。

近代に入つてからのトミストは一般に認識論を形而上学の一部として取扱う。之れは大體次の三種に分けられると思う。

(a) 最初の部分として取扱うもの、
Maritain, Garrigou-Lagrange.

(b) 第二の部分として取扱うもの、
Pirota, Gredet.

(c) 最終に位置するものとして取扱うもの、
Jolivet, Gilson.

Jolivet は認識論を反省的な形而上学の一部として考えざるが故に (cf. *Le thomisme et la critique de la connaissance*, Paris, 1933 p. 110) 又 Gilson は常に自己の業績と、目標を知るものは形而上学であるといふ理由で (Le *Réalisme méthodique*, Paris p. 86) それぞれの種類の属すると思ふのである。

この分類で就いては L.M. Regis, *St. Thomas and Epistemology*, Milwaukee 1946 pp. 83—84. 参照

ところでこの形而上学的存在とは、マリタンによれば、*理拠的存在(概念的) (l'être de raison)* とは異なつた本質であり可能態である。即ち実在の本質 (*l'essence réel*) 可能的存在 (*l'existence possible*) を意味する。これは思惟

とは独立の、実在せる存在 (*Petre existant*) ではなく、感覺的存在から引き離された別箇の存在であり、全く可知的な価値を持つてゐる存在である。この存在は勿論我々の感覺に委ねられた個々の存在の中に知覚されるのであるが然し単なる実在せる存在としてではなく、永遠の要求を含むものとして把握される存在なのである。^(註)

註 かゝる意味で即ち、存在のかゝる本体的な性格——存在を、*possible* 或いは *essence* と名付けたと考えられる。

かゝる存在を、我々が *Intuition abstractive* ^(註1) によつて、即ち形而上学的直観を特徴づける直観によつて我々が把握せんとするのがマリタンの問題であつた。我々が感覺的事物の裡に存在の超越的な類比的な価値を把握する事の出来るのはかゝる *Intuition abstractive* ou *métaphysique* に於いてである。かゝる *Intuition abstractive* の確証の考察は又々我々の智性の自然的な主張が如何にして可能なりや、又如何にして基礎づけられるや^(註2)を明らかにするマリタンの認識論の中心課題ともなるのである。この *Intuition métaphysique* の確証に於いて我々は所謂 *l'objection des idées* の問題に対するマリタンの解決を知る事が出来るのである。

註1 *Intuition abstractive* に就いてはマリタンは *la philosophie bergsonienne* p. XXXVI. に於いて次の様に云う。

「近代哲学に於いて用いられる意味に於いての直接的な、さかの知覚 (*la perception directe, immédiate*)」であり、これはあらゆる推論とあらゆる証明を超えた非常に端的な見地を示めすものであり、その豊饒さとその能力に就いて何ら外部から他のものを以つてして示めす事の出来ない「言語を絶した (*transverber*)」ものであり「光輝やくもの *l'illuminateur*」なものと規定している。そしてこの直観の対象は他のトミストと同様に、存在である事、然かも知的性格を持つ、この直観の対象である事を強調する。この様な直観の特性はベルグソンのそれと非常によく似ている。が然しマリタンはかゝる直観を知的なものとして見るか否かによつて自己のものをベルグソンのものから区別している。

註2 cf. *Réflexion sur l'intelligence et sur sa vie propre*. Paris 1938, pp. 47, 48, 55.

我々は以下に於いて如何なる条件に於いて、又如何なる度合に於いて我々の *idees* の価値を形而上学的世界に於いて、マリタンが確立せんとするかに就いて、又その後で目標を同じくするもその解決法に独自の見解を示す、同時代のマレシアルに就いて一瞥して、それぞれの特色を考察し、この *L'objectivation des idées* の問題の意味を考究しようと思う。

§

§

§

マリタンについての *L'objectivation des idées* ^(註1) の問題は事物 (*la chose*) と対象 (*l'objet*) との *L'objectivation* の問題になる。^(註2)

先づ事物は対象と共に、又それによつて与えられる。これら二つのものを分離するのは全く矛盾である。^(註3) 事を証明せねばならない。

我々は事実、予め対象が事物のの側面或いは内面である事を措定する事は出来ない。むしろ逆に我々についての問題はこれが斯くあると云う事を証明せねばならない。

註1 マリタンの „*Degrés du savoir*“ に於いて、又 „*Réflexion sur l'intelligence*“ 等に見られる見解を一応まとめて考察したいと思う。彼の認識論の基本的な線は „*Degrés du savoir*“ 中の „*Realisme critique*“ と „*Connaissance elle-même*“ に於いて *compendium* の形で示められている。尚概念論に就いては „*Realisme critique*“ 中の „*le concept*“ の項の外に巻末の „*A propos du concept*“ に示められている。近代的批判的要求を以て „*Realisme du Sens commun*“ を確立せんと試みるマリタンの認識論的配慮と、所謂 „*l'ontologie de connaître*“ とに於いてこの問題を考察して行きたいと思う。そしてこの認識論的部分の解釈と存在論的部分との解釈とを結合して考えて見たいと思う。

„*L'objectivation des idées*“

cf. „Van Riet, L'épistémologie thomiste“ Recherches sur la probléme de la connaissance dans l'école thomiste contemporaine, Louvain, 1946. 〇廿〇 „Maritain“

註2 マリタンに於いては事物は l'être extramental と考えられ、対象は l'être mental である。前者は又 l'être du métaphysique, l'essence réel, le réel possible である。後者は l'être du logicien, l'essence abstraite, l'être de raison と考えられる。cf. Degrés., p. 176. „chose et l'objet“

註3 Degrés., p. 181.

ところで考えられるのは、この証明を知的把握によつて解決せんとする試みである。知的把握のみでこの問題は解決出来るであろうか。知的把握の目標はあくまで事物の存在の様態 (modus essendi) から引き離された可知的本質であり、^(註) 智性に於いては事物はもはや事物ではなく、こゝに見出されるのは事物の本質 (l'essence ou la quiddité) なのである。》

註 Réfl., p. 18. cf. Degrés., pp. 176—77.

かゝる本質は知的形相であり、これは既に l'esse extramental の性格を奪われて、l'esse intentionnel の性格を持つてゐるものである。とすればかゝる知的把握のみにてはこの問題を解決する事は不可能である。では一体如何に之れを考えるべきか、我々が認識に於いて行い得る単純知解に於いてはどうであろうか。

我々の単純知解に於いては、事物の把握は前述の知的把握とは異なりかゝる l'esse intentionnel と l'esse extramental との区別は生じない。従つて我々はかゝる知的把握ではなく、単純知解の如きものを我々の認識の裡に取入れれば、この問題の解決は可能とならう。こゝで考え出されたのがマリタンの抽象的直観 (l'intuition abstractive)

である。かくの如き直観によつて認識された本質は事物の本質と同一であり、かゝる直観によつて獲られた本質はその過程に於いて何らこの事物の实在性を変形されはしない。この様な対象に於いては事物と、この対象の可知的本質に關しては何らの *desimilitudo* は存在し得ない。こゝには存在と思惟の同一性が成立し、知られたものは存在するところのものと何ら異らないと云う事、事物の本質は智性の裡にその普遍的な存在様式を持ち、事物の裡にその個別的な本質として存在すると云う事、そして何らこの本質は、我々の認識と云う事実によつて内的な規定も、厳密に云つて如何なる規定をも之れに附与する事はないのである。この知的直観に於いて我々は又或る意味で、完全なる智性^(註)の知解に分与し得るのである。事物と対象の可知的内容に關する同一性をマリタンは知的直観に訴えて確保する。こゝに我々有限知性の *Intellection sauvée*^(註) が存在すると彼は云う。

然し我々は批判的な立場からして認識された本質は外的なものであると云う事、換言すれば認識された本質の *métalogique* な価値を示めず事には前述の *intellition sauvée* では解決し得ない。純粋な対象 (*intramental*) は不可能である事、あらゆる対象は少くとも可能的な事物の可能的な存在を要求する事^(註)を我々は示めさねばならない。之れを如何に解決するか。

註 Degrès, p. 187.

マリタンは判断が之れを行うと云う。

如何にしてマリタンはこの問題を判断によつて解決しようとするのか。

マリタンによれば、判断は、*« ita est »* と云う肯定或いは同意の躍動的な内在的な働きであり、……これによつ

„L'objectivation des idées“

て智性は自己が把握したものは斯く斯くの仕方^(註)で精神の外に存在すると云う事を判断する。判断によつて精神の外にある或いは extramental な述語と、これと概念上同じものである主語との同一性を言明する。従つて判断の本来的な働きは、我々の思惟を単なる本質の世界から實在への世界へ、思惟の裡に示めされた單純なる対象の面から實在を持つ事物の世界へと移行せしめるものである。概念によつて示めされた本質の世界から、可能的實在の世界に於ける事物の存在を肯定するにあるとマリタンは云う。^(註)

註 cf. Degès., p. 188.

かゝる判断論はスアントロール^(註1)に依拠して居るのであるが、然しその示す役割に就いてはむしろ後述する如くマレシアルのそれに共通なものがある。

さて存在の把握はあらゆる我々の知的把握の中に含まれるが故に、基本的に我々の形而上学的な認識の価値を保証してくれるのは同一律の原理の明証性とマリタンは考える。この原理は我々の *l'intuition abstractive* によつて獲られた存在は理念的観念的な存在——純粹の可能的存在ではなくして、實在せる存在である事を保証してくれる。と云うのはこの原理を単に思惟の原理としてのみ考え、事物の原理としての性格を拒否する事は不可能であり、この原理は事實精神の外に存在する事物の最高の原理として考えられる場合に始めて思惟にとつての最高の原理となり得るのである。^(註2)

最後にこの判断に於いて我々は始めて我々の智性が實在に到達し得ると云う保証と、その適応性^(註3)が自然的なものであると云う事を聖トマス^(註4)と共にマリタンは承認するのである。

註1 Charles Sentroul (1876—1933) cf. La vérité et le progrès du savoir, dans Revue néo-scolastique de Philosophie. t. 18 (1911)

註2 Degrés, pp. 183—184.

註3 我々の真理への適応性を判断の結果に於いて認めるマリタンは、認識を一つの運動、目的に向つての運動と考え予め我々の智性の真理への適応性を承認するマレシアルとは対蹠的である。

註4 cf. St. Thomas, de Veritate, a I. q. 9.

結局のところマリタンによれば我々の l'objectivation の問題を解明し l'intuition abstractive を保証するのは、思惟の原理としてばかりではなく事物の原理としての同一律の不可疑的な明証性、智性が少くとも事物を認識していると云う最初の保証としての我々の認識能力の一般的な誠実性、最後に真理概念の三つの原初的な経験であると考えられる。^(註2)マリタンにとつて批判の最初の明証、即ち必然的な明証は存在若しくは實在に就いての知的把握に於いて見出される同一律の明証性である。^(註3)我々の獲得したあらゆる認識をそこへ還元し、そしてそこに於いて我々が事物と先づ最初の生き生きとした交渉を持つ点を見出す原初的な事実なのである。かゝる原初的な事実について我々は事物と対象との可知的内容に關しての同一性を獲得する事が出来る。

註1 この段階に於ける真理は反省的智性によつて獲られたものではない。低い段階に於けるそれである。

註2 cf. Degrés, pp. 146—147.

註3 Ibid., p. 149.

以上認識論的反省の純粹に知的な段階に於いて l'objectivation des idées の問題に就いてのマリタンの解決を考察して来たのであるが、尙一層この問題に就いての詳細な考察のために、この解決をマリタンの l'ontologie du con-

naïveのテーゼに挿入しつつこの問題の存在論的解決を考察しよう。こゝに於いては形而上学的基本原理を以つてして intuition abstractiveが基礎づけられる。次に知的把握の本性を規定し、この把握の忠実性 (la fidélité) が考察される。更に形而上学的見地から当面の問題 — l'objectivation des idées — 即ち我々の知的把握がどのやうにして対象の把握と同じ意味で事物の把握を保証するかと云う問題の解決が示めされるであろう。勿論、この問題に就いてはマリタンの七つのテーゼによる^(註) l'ontologie du connaîtreに於いては述べられては居らないが、我々が上述した認識的部分の考察によつて補ぎなう事によつて、この問題の明確な解答を得られると考えられる。

註 このテーゼに従つて述べて見よう。マリタンは breviter studio のためトマス認識論を七つのテーゼに集めている。

cf. Degré., pp. 217—230.

「知る」と云う事、これは何らかの仕方で在るところの他のものになると云う事^(註1) (necesse sue fieri aliud in quantum aliud) 従つて認識と非質料性との間には有機的関連が存在する。即ち存在はその非質料の度合に応じて認識されるのである。

知ると云う事は単に事物を創造する事にでも、又之れを受けとる事にでもあるのではなく、^(註2) 非質料的 (immaterialle) に能動的に存在を超える (la surexistence) 事である。

註1 Degré., pp. 217—8.

註2 Ibid., p. 219.

勿論我々の認識の働きの裡には (感覺的であろうと知的なそれであろうと) l'image や概念 (le verbum mentis)

の如きものを作る作用は存在する、が然しこの内的な働きは後述する如く認識そのものの働きではなく、これは認識の条件であり手段 (*id quo*) である。従つてかゝる *la surexistence* は内在的な働きであり正しく我々の生命的な働きなのである。

ところでかゝる *la surexistence* 即ち主観に於ける対象の内在 (*l'immanance*) を説明するために、トミストは一般に知的形相 (*la species*)、志向的存在 (*l'esse intentionnel*) — *l'esse extramentale* に対して — を措定する。更にこの形相は二つの内的な規定に分たれる。印刻された形相 (*la species impressa*, *la forme présentative ou objectivante*) と表明された形相 (*la species expressa ou le verbum mentis*) とに區別される。

我々は先づ感覚によつて事物から知的形相を受けとる。こゝに於いて智性は第一現実態 (*actus primus*) に於ける対象となる。これは *la species impressa* である。次ぎにこの *la species* に対して我々の能動理性 (*intellectus agens*) が働いてこの質料と合成されている *la species* を非質料化 (*dematerializatio*) する。こゝに *la species expressa* が出来上る。そして智性は第二現実態 (*actus secundus*) に於ける対象となり、こゝに完全なる対象の内在、主観内在が成立し、主観と事物との一致が行われる。^(註)

註 cf. Degrés., p. 227.

さてかゝる全く傾向的な非質料的な存在、……ただ他のもののために、そして関係としてのみ存する存在、^(註) へそれによつて事物が、精神の中にもその固有の存在とは異なつた存在として、在る存在、^(註) を我々は *l'esse intentionali* と名付けたのであるが、この存在は存在 (*l'être*) に対して如何なる関係を持つてであろうか。志向的存在が存

„L'objectivation des idées“

在に属するものであろうか。

註 cf. Degrés, pp. 2221—222.

一体、志向的存在はマレンシアルの云う如く存在の秩序に属するのであろうか。認識の存在論は存在論であらうか。

マレンシアルはあらゆる認識をすべて自己の意識に還元しこの意識に立止つて専らこの意識の把握に存在的先立つ認識の形而上学的諸条件を探究する。マレンシアルに於いては志向的存在はかゝる認識の諸条件の一つであり、この証明は又彼独自の見解を示めしてくれるのであるが、これは少くとも存在の秩序に入り得ると考える。然かも彼によれば、純粹現実有から純粹質料に至る迄の全存在の階層の中にこの志向的存在は挿入されるのである。^(註1)

之れに対してマリタンは志向的存在は如何に考えるか。マレンシアルとは反対にマリタンは専ら我々の認識能力の意識的な諸性格を探究する。我々が認識と呼ぶところのものの本性を探究せんとするマレンシアルは、^(註)この志向的存在と自然的な存在とを峻別する。そしてこの自然的な實在せる存在と同じものとして考える。^(註)従つて志向的存在と自然的存在とを共に存在と見做し我々の認識のすべてを、これらの存在の何らかの合成 (actus と potentia の合成) によつて説明せんとするマレンシアルに対して明確に反対の立場をとる。

註1 cf. La point de départ de la métaphysique. Chair. V.; Van Riet, L'épistemologie thomiste, pp. 286—88, pp. 369—8.

註2 Degrés, pp. 221—224.

ちよ La species は我々の知的な働きの主体でありその目標であり、それは存在的な側面を持つて居るとは云い、然しこれは我々の智性に於ける自然的存在の変容 (les modifications) として存在するのである。即ちこれはあくま

でも主観内在に於ける存在であつてこれのみでは我々の認識を何ら構成出来ないのである。^(註)

註 Degrés, p. 228. Thèses VI.

この *la species* はたゞ我々によつて予め要求された諸条件にしか過ぎないのである。この *la species* が認識能力に対して役立つのは、この存在が全く志向的なもの、即ち本質的に純粹に我々の認識の *id quo* として考えられる限りに於いてなのである。志向的存在を直ちに存在として考えるマレシアルとは異なりマリタンに於いてはこの志向的存在は全く意識の精神の論理的なものの形而上学的名辭なのである。これは確かに「精神の言葉」(*le verbum mentis*)なのである。従つてこれは実在せる存在、精神の外に存在せる、*métalogique* なものとは異なつた本性を所^有しているのである。

以上によつてマリタンの志向的存在の概念をマレシアルのそれとの比較に於いて考察して、その存在的特性を明らかにして来た。

さて次ぎに問題となるのは、かゝる特性を有する志向的存在が、我々の認識即ち存在を確実に把握する事を我々に保証してくれるか否かと云う事である。換言すればこの志向的存在の認識論的特性が我々の関心となつて来る。

マリタンはこの志向的存在を定義して次の様に云う。：「通過の存在」(*l'être de passage*) 即ち「存在せる事物がある一定の効果を生ずるために十分に整理され昇華され、非質料化 (*spiritualisée*) された存在、即ち意識の対象となる存在^(註)」と考える。然しこの存在は勿論マレシアル流の存在ではない。では一体如何に前述の問題を考えたらよいか。マリタンはこゝで問題をせばめて専ら *la species expressa*。— *le verbum mentis*。— *le concept* とその目を注

ぎ、この問題の解明に努力する。^(註)

註 Degrés du savoir に於いてはもはや la species impressa に就いての考究はなされず専ら Realism critique に於ける概念論、更に主としてローランド・ゴッスランによる反論に答えての詳細な概念論 (A. propos du concept) を展開し更に章末に聖トマステキストを引用し自分の註 (Remarque) を入れている。彼に於いては認識の中心要素・楔機はこの概念に存すると考える。

ところでこの Le verbum mentis. (概念) の特徴は何か。之れに就いて我々は Degrés の „A propos du concept” に於いて compendium の形で述べられた十二のテーゼに就いて考察しよう。トミストにとってはこの概念は常に id quo の性格を持つものであり、これは知られる当のものではなくして、それによつて事物 (id quod) が知られるところの媒介物を意味するのである。これは全く手段 (le moyen) であり、表わされているものを知らしめる前に我々にとつての対象として知られるが如き用具的なサイン (le signe instrumental) ではない。^(註一) これは又たその本質が、示めす表示する (signifier) と云ふ事^(註二) だけである。《が如き形相的サイン (le signe formel) 》なのである。概念の本性はたゞ知らしめる (《faisant connaître》)^(註三) だけのものなのである。

註一 Degrés, p. 232.

註二 Ibid. loc. cit.

註三 Ibid. p. 771.

概念が単なる le signe instrumental ではなくして、その本質が faisant connaître に存するが如きものであるとすれば、一体この概念は何を知らせるのか。如何なる意味でこれは le signe なのか。概念は我々の精神をして可知

的対象を知らしめる。^(註)

註 Degrés, p. 780. n IV.

ところでマリタンによればこの概念はこの知らしめると云う働き (le signe formel) の外に、更に第二の性格、即ちその内容に関しては対象と同じくになると云う事である。我々の認識の働きに於いて我々の智能に表われる本質的な要素の面を考察するとき、概念と対象との同一性が考えられる。^(註1) トミストの中には単に概念と対象との間の可知的構成物に関してのみ之れを考えるが、マリタンにとつては、対象との純粋な類似性が存在するが故に、^(註2) 其の存在の面からすれば事物と異なるも、^(註2) 其の可知的内容に関しては、^(註2) 全く概念は対象と区別し得ないと云わねばならないと考える。

ところで対象と概念とが認識の働きに於いて、我々に与える可知的内容に於いて同じものであるとするならば、如何なる意味で概念は対象の *le signe* であり得るのか。^(註)

註 Degrés, p. 770. の疑問は R. P. Roland-Gosselin によつて提出された。

勿論この概念と対象との間に全体的な同一性が存在するとすれば、かゝる疑問も生ずるであろうが、これら二つのものの関係は *le signe* と *le signifié* との間の同一性なのである。形相である限りに於いて、概念は *le signe* なのであり、従つてそれは全く、*faisant connaître* “でなければならず—対象の純粋な表象若しくは代替物でなければならぬのである。^(註) 其の同一性の関係は *le signe* そのものによつて要求されるのはこゝに於いてである。^(註)”

註 Degrés, p. 771.

„L'objectivation des idées“

たゞこれらの相異は対象は事物と同じものである限り精神の裡にばかりでなく、*« extra mentem in esse naturae »*に於いても存在し存在し得るのであるが、概念は *la species* そのものの機能に於いて（従つて又その存在的面からすれば、表象された対象とは異なるのである）*« in esse intentionali »*のみ存在するのである。^(註)

註 Degrés, p. 772.

換言すれば、対象は常に精神の外に存在するものとは実在的に異ならず、概念はあくまでも *mental* な領域に止まり、その存在的な側面からすれば表象された対象とは異なるものである。

かゝる概念に就いてのマリタンの研究は彼の *l'ontologie du connaître* の本質的な部分を構成するのである。^(註)

註 マリタンと同じく認識する事は即ち知解する事 (*le comprendre*) と考え、認識の本質的契機に概念をとる者として、Lepidi, Gardell, Garrigou-Lagrange, Roland-Gosselin がある。概念に重点を置くことより点では Descartes に確かな關係づけられるがトミストの関心は専らこの概念の客観性—その形而上学的価値の確立にあり、むしろ彼等は彼等と Descartes との關係を絶つ事に専心した。マリタンの *Realisme critique* (*dans les Degrés du savoir*) はその代表的なものである。

マリタンに於いては事物の概念を作る事、この概念に於いて、事物が如何に存在するかと云う事が彼の認識論の一つの課題であつたのである。

かゝる *l'ontologie du connaître* を更に完全なるものにするためには、かゝる概念によつて判断が遂行するところの判断行為の形而上学的解明を考察せねばならない。と云うのは、単純知解を除いては、我々の智性にとつては判断以外 *l'objectivation des idées* の問題を解決してくれるものが存在しないと考えられるからである。

マリタンは *l'objectivation* の問題をこの *l'ontologie* に就いて省略し、たゞ認識論の批判的部分に於いて解決されたと考えた理由を以て *l'ontologie du connaitre* の形而上学的テーゼ^(註)の中に *compendium* の形で挿入しているのである。

註 *Degrès*, pp. 221—230. pp. 779—791.

マリタンは我々の智性の対象は常に実在せる存在、即ち現実的にしろ可能的にしろ存在する事物である事を信じていた^(註1)ので、事物と対象とは、その可知的内容に関しては何ら異存ない事、事物と対象とは一つ (*un*) となる事を疑わなかつた。更にマリタンに於いては、事物と対象とは全く同等のもの (*équivalamment*) として考えるのである。^(註2)

註1 *Degrès*, pp. 779—780. (n I—II).

註2 *Ibid.*, p. 780 (n III—VII).

概念は同時に („à la foi et du même coup“) 表象する概念 (*le concept signifiant*) と表象された対象 (*l'object signifiée*) を含むのである。

精神は概念を作る、そして又この同じ働きによつて、概念の裡に事物を知覚し (*conçoit*) そしてこれを対象として把握するのである。 (*perçoit*)

従つて我々の智性は概念が示めてくれる度合に従つて概念の裡に客観化される事物に適合する度合に相応じて、事物に到達し得るのである。概念は全く純粹な *id quo* なのである。之れを要するにマリタンの概念論は事物の *le signe formel*^(註) である事を示めようのである。

„*L'objectivation des idées*“

註 Degrès, p. 783.

ここで我々は何故に専ら、対象が概念の形で如何にして知られるかと云う問題、従つて我々の知的把握の分析のみを事とした事実を首肯し得るのである。

さてローランド・ゴッスランによつて提出された問題^(註1)に対してのマリタンの解答の中に上述の判断論と概念論とを結びつけ、我々の l'objectivation の問題の解答の一つを見取る事が出来るのである。先づこれに就いてはマリタンの le verbum mentis に就いて独自の見解^(註2)を見よう。

マリタンによれば、le verbum mentis を単に概念にばかりでなく更に我々の智性によるあらゆる合成的作用にまで—即ち精神の第一の作用による定義や分割—そして第二の作用による言表—即ち判断に迄拡張して解釈するのである。

註1 cf. Degrès, p. 786.

註2 Degrès, p. 786. (n. XI).

判断に於いて我々は「在るものは在る」、^(註1)「ないものは無い」と我々は言表する。△この言表は—智体の綜合分割の作用の結果としての—は確かに我々自身のものであり、我々自身の裡に在るものである。従つて真偽—事物と我々の智性との一致不一致の関係は我々の智性のこの作用、即ち判断の裡に存在する。かゝる言表によつて表明された le verbum mentis は確かに事物そのものとは同一のもの (deux avec la chose) とはならない。然しながら判断によつて結合されたり分割されたりするこの概念の各々のものは対象と一つとなる。従つて又事物と、その可知的内容に

関しては一つとなる (*ne fait qu'un*)。従つてこの *le verbum mentis* は „*scio aliquid esse*” と云う事を明らかにする。即ち主語と述語と云う概念に於いて認識の対象と考えられた事物を、私が結合したり分割したりすると云う事を明らかにするのである。^(註2)

註1 Degrès, p. 781.

註2 Ibid., pp. 786—7.

上述の如き判断論と概念論を結びつけんとする *le verbum mentis* の解釈は、判断論に一つの新しい光を与えてくれる。^(註) 概念の結合分離は我々に属するものであり、これは又肯定の場合の如く、少くとも可能的な超主観的な存在を要求する。

註 かくる *le verbum mentis* の解釈は一般にトミストの用語としては認められては居ない。然しマリタンは聖トマスに於いても、かくる解釈が可能となる事を次のトマスの文を引用する。„*de Veritate*.” a. 3. q. 2.

cf. Degrès 787. note 1.

ところで、彼の存在論に於いて判断の本質的な要素としての概念の綜合 (*la synthèse*) を考え、その認識論に於いて、この綜の肯定 (*l'affirmation*) を考えるならば、即ち二つの概念の綜合に於いて対象の知的把握 (*l'apprehension*) を、そして判断に於いてこの結合された二つの概念の綜合の肯定を考えるならば、一見、マリタンに於いて見られる認識論的批判の解釈と存在論的批判のそれとの間の不調和は消失する様に思われるのである。又これによつて概念論に於いて見られる困難も一応容易に解決されるであらう。^(註)

註 cf. Van Rier, *L'épistémologie thomiste*, p. 374.

„*L'objectivation des idées*”

マリタンによれば、この概念の結合は、我々が獲得する単純知解の内容と同様に、その存在論的見地に於いて与えられる。そして概念の合成は直接的に対象を、そして合成された概念が示めす対象の、合成された対象の実在性を言明する。この判断に於いて対象は事物の面に移し入れられるのである。概念論を判断論に移行せしめ、我々の概念の綜合からこれらの概念の実在性の肯定を可能ならしめるもの、これは上述したる二面性を持つ *la verbum mentis* の考察に於いてである。この *le verbum mentis* に相応ずるのは従つて単なる対象ではなくして全く事物なのである。

マリタンに於けるこの *le verbum mentis* の独自の考察は *l'objectivation des idées* の問題に於いては見逃し得ない役割を演じて居るのである。

判断論と概念論を結びつける *la verbum mentis* は我々の判断の忠実性 (*la fidelité*) を保証する。対象の *le signe formel* としてその可知的内容に関して事物と一つとなる *le verbum mentis* の一面は又我々に事物と対象との同一性を保証してくれる。かゝる相異なる二つの機能によつてマリタンは „*cognoscens intentionaliter fit (vel est) aliud a se*” 事を説明し我々の *l'intuition abstractive* の抽象性と直観性の二面によつて *idées* の価値を、形而上学的領域に於いて確立せんとする。

§

§

§

さてその問題の解決と、その方法とは各々異なるもその問題指定とその目標とに於いて、マリタンと軌を同じくするマンシアルの *l'objectivation des idées* に就いて考察しよう。彼等はもはや虚偽の問題や、その素朴性と独断性から

脱れるための普遍的懐疑に就いての議論には興味を持たない。共に私は或る物を認識する事を意識する (j'ai conscience de connaître que—que en tant qu'est) 批判的立場に立つて、我々の認識の様式を説明しその可能性の諸条件を探究し、我々の idées の価値を、そして我々の認識の価値を確立せんとする。

以下に於いてマレシアルの解決を簡単に考察しよう。マリタンと比較しよう。

さて、マレシアルは l'objectivation の問題に直面して、次の如く考える。

(一)、如何にして主観的な存在論的諸条件と、客観的な存在論的諸条件との一致が我々の意識の把握としての性格を持ち得るか、換言すれば、我々の認識に於いては対象が主観に内在する (immanence) とは如何なる事か、如何にあるべきか。

(二)、主観と対象とが一致する。かかる主観内在に於いて生ずる意味の把握が主観に対立する対象の意識として如何になり得るか。

我々は一般にトミストの認識論に於いては、最初の問題の主観内在の如何なるものかに就いては充分なる解答を用意している。即ち彼等は共に云う。

我々の認識能力の非質料性 (immaterialité) を以つて、我々との主観は対象と一つ (un) となると。即ち、志向的 (intentionnel) に „un“ となると考える。

然しながら第二の問題、即ち „aliquid in quantum aliquid“ としての意識の把握を如何に考えるかに就いては、これ迄少くとも一九世紀初期に至る迄は、問題とはなり得なかつたし又、充分には解明されていなかつたのである。かかる曖昧性を le dynamisme intellectuelle — 彼独自の学説に訴えて、消散しカント以来の不可知論を、カント自

身の出発点をふまいつつこれを超克せんとするのがマレシアルの l'objectivation des idées の論点である。

マレシアルは、彼の予備的批判 (Preamble Critique) の部分に於いて、我々の認識能力が実在なるものに到達するや否やを問う事なしに先づ我々の対象に就いての意識を分析する。そしてその本来的な批判的な部分、即ち、形而上学的批判 (la critique métaphysique) に於いてマレシアルと同様我々の認識能力の実在、把握の批判的価値を確立せんと試みるのである。^(註)

註 本論中のマリタンの項を参照。cf. Van Riet, L'épistémologie thomiste., „Joseph Maréchal“, pp. 283—299.

さてマレシアルは彼に至る迄の我々の認識能力の受動性 (la passivité) によつてこの問題を解決せんとする試みを拒否する。

我々の経験に於いて与えられる所に (le donné) を、純粹に感覺的な秩序に於いて考え、かかる感覺作用の価値を明確にする事によつて、我々の認識の形而上学的価値を保証せんとする態度、^(註)そして空間的な外来性と可知的な実在を混同する態度、かかる態度に於いては、我々は感覺された対象が我々の認識によつて何ら変形 (déformé) されないと云う事を、又我々の認識によつて、何ら主観によつて解釈 (interpréter) されていない事を保証せねばならない。

註 これらの態度をとるものには、Gény, Frages, Tonquédec 等がある。

かゝる説に於いては、我々は更に問題として知覚の完全性 (la perception intégral) を証明せねばならない。^(註2)

更に感覺的、知的秩序に於いて、之れをなさんとする者、^(註1)精神的 (spirituelle) な秩序に於いて考察せんとする者に於いても事はうまく運ばない。我々の認識の客観的価値はマレシアルによれば超越的な絶対者 (l'absolue) を含まね

ばならないものであつて。たと我々の概念を一定の實在(有限)者、個別的な實在者に適用し得ると云う事。即ち単なる感覺的現象の論理的遡行^(註3)のみは、充分ではない。我々は事實認識に於いて、感覺と智性の境界線を引く事は不可能である、と。

註1 これに属するものは、Noël, Vries 等がある。

註2 之れは、Picard, Zamboni 等がある。

註3 Degès, p. 330.

かゝる *la passivité* によつて *l'objectivation* を説明せんとする試みの不充分さから逃れてマレシアルは、智的な働きの種類化する形相 (*la species*) を内的に惹き起し、他方、現象の彼方に智性自身が超越してゆく目的性の関係 (*la relations de la finalité*) を指定する。この *la relation de la finalité* の説明は、*l'objectivation* の説明と、同時に又、彼の *le dynamisme intellectuel* の説にも迫つて行く。智性を靜的に考察するだけならば、智性は事物の形相しか、事物の形相的な *dessin* しか知ることは出来ないであろう。然しこれを動的に考察し我々の智性を能動的な機能と考える時、我々の智性は現象の世界を超えて目的に向つて生成してゆく一つの運動として把えられる。^(註) 智性はここに於いて、自らが把握した形相 (*la spices*) を客観化し、そして之れを一つの「*自体存在*」(*être en soi*) として指定する。これが存在する、(*ita est*) と云う肯定に於いて、智性は絶えず、この「これ」(*ita*) の個別的な規定性を超えてゆく。何に向つてか、智性はここに於いて絶えず、一つの目的、實在的目的に向つて超えてゆくとマレシアルは答える。かゝる超越を可能にするのは *l'affirmation* に於いてである。マレシアルによれば、判断に於いては概念の綜合、具体的統一的綜合 (*la synthèse concrétive*) と *l'affirmation* を含む。この *l'affirmation* は判断の本質的な

要素と考えられ我々の非直観的智性にとつてはこの *I'affirmation* は直観の動的な *substitut* を構成するものである。

I'affirmation は対象によつて結果されたる概念の綜合をなし、これを実在的な目的に関係づけながら真理を賦与する。マリタンと同様マレシアルはこの *I'affirmation* を以つて、主観的な形相の *I'objectivation* として考へ、*Je dynamisme intellectuel* に訴へつゝこの形相から、存在論的对象、"存在そのもの"の面に移るのである。^(註)

註 マレシアルに於いては志向的存在を一種の存在として措定し、存在へと押し進めてゆく論点は独自のものであるが之れに就いてはマリタンの志向的存在との比較の箇所を参照。

§

§

§

マレシアルは、判断、特に *I'affirmation* を重んじ、この判断に於いて、*I'objectivation* を解決せんとする。マリタンは *la verbum mentis* の果す二重の役割を考察する事によつて我々の *idees* の確立を可能的本質の、形而上学的、世界に対して、なさんとする一方ブロンデルの *I'acion* に依りつゝ我々の智性の動的な面の分析により我々の認識を一つの運動 (*le mouvement*)、可能態から現実態への上として考察する。カントの実験的側面から出発し彼の不可知論を *le dynamisme intellectuel* によつて克服せんと試みる。

他方我々の智性が自己自身の反省する時智性は自らが把握したものを *etre en soi* として措定する、と云う聖トマスに従つて、解決せんと試みる。事物と対象の同一性、対象と概念の同一性、二重の面を含む事物との可知的本質に於いての同一性を主張する *le verbum mentis*。

ベルグソニズムから出発してベルグソニズムを超克する。^(註) *I'intuition abstractive*。

これらによつて l'objectivation を解決せんとする。

註 cf. Philosophie bergsonienne.

嘗つてはベルグソンニアンであつたマリタンは、ベルグソンの „bergonisme de fait“ を排斥し „bergonisme de raison“ を評価する。

存在論的対象の概念、判断の本来的な機能、認識の存在論に於ける批判の重要性、そしてこの l'objectivation。これらの諸問題に於いて、マレシアル、マリタンは共通の問題を持ちながらも、各々異なつた解答を以つて各々ブロンデル・ベルグソン結局はカントに於ける論争の中心点である、可能的本質の形而上学的世界に対しての idées 価値の確立を試みる。彼等は共に判断に於ける概念の総合と肯定或いは同意 (l'assentiment) の働きを区別する。そしてこの働きに於いて我々の認識の客観的価値を見んとする。

§§

§§

§§

la philosophie d'action (Blondel), la philosophie d'intuition (Bergson) 等の新哲学との接触によつてトミストの認識論は専ら二つの問題、即ち l'objectivation des idées の問題にその注意を向ける。

この l'objectivation に対するトミストの解決の方法に就いて二つの仕方が考えられる。その一つは可能的本質の“形而上学世界”に対して、又一方外的存在の“物理的世界”に対して、^(註1) 各々 idées の価値を確立すると云う事である。これら二連の問題に対してトミスト達は各々特徴ある解答を提示して来た。或る者は、感覚作用の客観性に於いて或る者は聖トマスに従つて智性の反省作用の本質^(註2)そのものに於いて、又或る者は絶対的な規準に対する我々の認識

„L'objectivation des idées“

の依存によつて、又マレシアルの如く *le dynamisme intellectuel* に訴ふる事によつて各々 *idées* の価値を確立し *l'objectivation* の問題を解明せんと試みる。共に彼等は (トンケデックは別として) 我々の形而上学的認識の客観的価値の確立を求めらる。

註1 十九世紀初期に於けるトミストの中 Tonquédec のみが *idée* の価値を「物理的世界」に対して、感覺作用の *l'objective* によつて確立せんとする。

cf. „La critique de la connaissance“ (Les principes de la philosophie thomiste). 1929. Paris.

註2 cf. Garrigou-Lagrange. „Les Sens commun.“ 1909. Paris. Maritain もこの分類に入れられる。

註3 cf. Gardell. „De la méthode dans le Philosophie du réel.“ La structure de l'âme et l'expérience mystique, 1927. 1927.

§

§

§

十九世紀初期のトミストの認識論の問題は、単純化されて一つの問題 *l'objectivation* の問題に集中されて来た。彼等の認識論自身にかゝる問題性の変化の根拠を持つと同時に、かゝる変化は新哲学特にブロンデル・ベルグソンの哲学との接触による新しい二つの方法、即ち、形而上学的方法 (*la méthode métaphysique*) と先験的方法 (*la méthode transcendantale*) とに由因すると考えられる。これらの二つの方法に於いて我々の認識の——非直観的認識の——様式を説明し、その可能性の諸条件を探求する事、これが十九世紀期トミストにとつての最大の関心であつた。

マリタン・マレシアルが予め我々の認識の一般的な確実性 (*la validité*) を、普遍的懐疑の不合理性と近代主観主義的観念論の不合理性を示す事によつて確証し、*la critique métaphysique* (マレシアル) と *l'étude métaphysique*

(マリタン)に於いて、我々の認識の形而上学的価値の確立を、この二つの方法によつて二重化した理由もこゝに有すると考えられる。

註 Degrés, pp. 143—144.

又批判的要求に自らの哲学を、認識論を繰入れて考察する事、これが近代哲学の一特徴とすれば、トミスト達が師聖トマスの哲学の裡に見出されなかつた批判的部分を *explicitement* に取出す事によつて、その素朴性と独断性から脱れ、自己の哲学の、聖トマスの哲学の批判性を近代的批判の要求に合致させんと努めて来た理由も了解出来よう。^(註)

註 批判的要求に対してトミストの中或る者は Descartes の *cogito* なしには如何なる形而上学も存立し得ないと云う。

„Il n'y a pas de bonne métaphysique sans prolegomènes critiques, et kant, et avant lui, Descartes, ont appris pour toujours à la philosophie quelque chose qui constitue un progrès essentiel de la pensée humaine“ (Noël, „Realisme immediate.“ 1938. pp. 22—24).

„La pensée n'est donc pas simplement, pour une philosophie systématique un point de départ possible parmi bien d'autres. C'est nous parait-il, le seul point de départ légitime. (Ibid., pp. 28. 45—46.)

ノエルは述べた Noël 及び cartesian method の代表者なものである。

又或る者は cartesian method を kant と対照し、真の批判は不充分と考へる。

形而上学は認識の予備的な研究なことは充分確立されるものではないと考へ、De lors, le probleme critique accepté prend une valeur logique antérieure à toute métaphysique, puis qu'il s'interroge sur la possibilité de la science et de la métaphysique. Il ne doit pas avoir recours à cette dernier pour établir la solution qu'il cherche, tant du moins que n'aura pas été justifié, pour connaître l'esprit lui-même, d'une science de l'être. (Roland-Gosselin, „Essai d'une Etude critique de la connaissance,“ pp. 10—11).

Noël はカント的批判の代表者と考へられる。

„L'objectivation des idées“

尙本論に論じた、P. Maréchal はカントの如き先験的方法による批判は存在しないとしても、然しその内容に於いては、二つの批判—カント的、デカルト的—が存在すると主張する。

尙之れに就いては、cf. L.-M. Rags, *St. Thomas and Epistemology* p. 29. pp. 73—74.

然しながら問題はかゝる近代的批判的要求のみが、真の批判性を持ち得、そしてこの批判性に合致する様努める事、その点に於いては敢えてその整合性のために聖トマスさへも曲解される可能性を含みつゝこれを試みる事、これが現代トミストに負わせられた問題であるかと云う事である。トミストはこそつて聖トマス哲学の中に、かゝる批判性を包蔵している事を、たゞ彼等の仕事はこの包蔵されたるものを *explicitement* に掘り出す事、この事によつて自己の哲学の正当性を確証するそれだけの消極的な価値しか聖トマスの認識論は所有していないのであろうか。^(註)

我々はこの疑問に、'objectivation' の解決とその方法とに就いて見たマレシアル、マリタンが答えてくれるものと考えられる。

註 cf. *Ibid.* „Plea of St. Thomas.“ (in *St. Thomas and Epistemology*).

存在、認識、真理、の過程は我々有限的な智性の認識にとつての不可避な前提であり、テーゼである。我々の認識の批判の出発点は、„Je pense“ではなく、„J'ai conscience de connaître au moins une chose, que ce qui est, est.“ 即ち „scio aliquid esse“なのである。我々は、この正当性の確証に於いて、各々マリタン、マレシアルの認識論的反省と、認識の形而上学的部分に亘つて、考察して来た。

各々の解決とその方法の考察と、併せてこの 'objectivation des idées' の意味を、その近代主観主義的観念論に対する態度に於いて考察し、更にトミストに於けるこの問題への態度を考察して来た。